

## 司祭団から

「さあ、出かけよう」

主任司祭 松本 勝男

教皇フランシスコは、二〇一三年一月に発表された使徒的勧告『福音の喜び』の二〇項で、「自分にとって快適な場所から出ていつて、福音の光を必要としている隅に追いやられたすべての人に、それを届ける勇氣を持つよう招かれている」と仰っています。まさにこれは、楽な生き方に甘んじるのではなく、イエス様の福音を必要としている人たち、特に「隅に追いやられた」貧しい人や弱い人たちに福音の喜びを伝える勇氣を持ちなさい、ということではないでしょうか。

教員生活が長かった私は、このメッセージを子どもたちにより分かりやすく伝えるためにどうしたらいいか考えました。そこで思い浮かんだのが、「タンポポ空を行く」というドラえもんのエピソードでした。

部屋の虫かごに咲いていた一輪のタンポポを捨てようとするのび太君でしたが、ドラえもんのみみつ道具「ファンタグラス」でタンポポとお話できるようになり、仲良しになります。のび太君としては、苦手な野球に加わってジャイアンたちからいじめられるよりは、庭に植えかえたタンポポとお話する方が楽しいので、家に閉じこもりがちになっていきます。そんな中、タンポポは立派な綿毛に成長し、子どもたちは風に乗って空に旅立っています。のですが、一つだけ怖がって飛んでいくのですが、一つだけ怖がって飛んでいくのと同じく、一つだけ怖がっていることにのび太君は気づきません。やがてその子も、お母さんに優しく励まされ、勇氣を出して空へ旅立っていきます。一部始終を見届けたのび太君は、自分も野球に入れてもらおうと一歩を踏み出すというお話です。

いかがでしょうか。甘えん坊のタンポポの子が勇氣をもって空へ旅立っていったように、それを見ていたのび太君が苦手な野球にチャレンジしてみようという気持ちになったように、私たちも「外に出かけていく教会」を目指していきませんか。

## シーゲル神父のこと

後藤 文雄

シーゲル神父が逝ってしまった。一九七五年、彼は吉祥寺教会に赴任して来た。三十才にも満たない青年神父である。

彼を受け入れる側の当事者として、困惑したことが一つあった。それは彼がアルコール依存患者であったということを知っていたことである。

私も四十六才という働き盛りであった。一日の仕事が終われば、テレビの前で、同僚と一献を傾け、その日あったことなどを話し合った。一日の疲れはそうした一杯、二杯の酒で癒された。

彼を同僚として迎えるということとは、我々も酒を断たなければならぬということになり、食堂の棚に並んでいた酒瓶はぜんぶ物置の奥にかくしてしまつたのである。

彼が着任したその晩は、アルコールなしの夕食会で終ってしまった。

三日間、誰も不平もいわず、しかし浮かぬ顔ですごしたように覚えている。突然シーゲルさんが改まった口調で聞いて来た。

「あなた方は誰も酒をのまないのですか」

「あなたがアル中だったと聞いたので、我々も禁酒することに決めたのです」

「飲むかどうかは私の問題です。迷惑をかけたくはありません。自由にしてください」

救われたという安堵感で他の者たちとうまい酒を味わった。

彼は厳格に禁酒を守った。そのあたりのことは彼の遺著となった『アルコール依存症に負けずに生きる―経験者が語る病理の現実と回復への希望―』（ミック・S著 ナカニシヤ出版 二〇一八・一〇・一〇）に詳しく記されている。

この本を手にして私は改めて彼が苦汁を味わっている人であることを知った。ある時、彼はしんみりと自分の父親のことを語った。

「第二次世界大戦の時、父はオースト

リア軍の兵士としてアフリカ戦線に従軍した。父は射撃の名手で対峙したドイツ兵を数知れず撃った。戦後復員してから急に酒にひたり、そのために家族はめちゃめちゃになった。」

その話に彼の苦汁がにじみ出ていた。人を撃った父親の苦しみ、母親の悲嘆、家族の分裂と彼はかくすことなく事実を語ってくれた。

彼はアメリカ留学中も、戦争を憎み、ベトナム反戦デモに参加したという。彼の戦争を嫌悪するのはそんなところからも生じていると思った。アルコールとのたたかいても、真摯をきわめ、勝利の栄冠を死をもつてかざったのである。

何年か共にした生活を通して、彼のことはよくわかつていいると思っていた。しかし、この本を通して彼の内奥の深さに気づかされたことも多い。彼は、アルコール依存症の患者であることを公言し、しかも司祭として聖務にはげみ、大学教授として若者を指導し、退職後も残された人生を平和運動やそれに類する本の翻訳に尽力された。

加えて指摘しておかなければならない

のは、今、都内の多くのカトリック教会が、AA（アルコホーリクス・アノニマス）の活動に積極的に協力しているが、そのはじめは彼に負うところが大きい。

また、一般社団法人JLMM（旧称日本カトリック信徒宣教会）の創始者も忘れられてはいるが彼なのである。これらの多岐にわたる彼の活動全般の源泉が先に挙げた著書に記されている。

「人間の真の幸せや充実、得ることより、与えること、貢献することによって得られる。根本において、受動的に生きるか、能動的に生きるかということが肝心である」（同書八十五頁）。

そこに記されていることを実際に具現して来た。その生きざまがその人生の各場面であつた。

彼の葬式の時の額入り写真はまさに彼のありのままの姿である。彼には、ローマンカラーをつけた写真が一枚もなかったのである。ただあの作業服姿の彼がいちばん彼をあますところなく彼をあらわしているのである。

他の人の幸福のため、他の人を大切に生きて生きてきた彼の姿がそこにある。

神学院からの随想①

# ガーナから帰って 思うこと

神言修道会神学生  
傍島義雄そばしまよしお

皆さん、お元気で経過ごしでしょうか。おかげさまで、私はガーナでの研修を終え、八月二十一日に無事に日本に帰ってまいりました。二年四か月ほど、ガーナで生活していたことになりました。日本国内からの投稿になるので、「ガーナからの随想」ではなくってしまいましたが、皆さんの中から新しい召命が生まれるようにとの願いと、自分も含め今の神学生たちの召命が育まれるようにとの願いから、今後も「シャローム」への投稿を続けさせていただきます。

ガーナから帰って間もない私は、日本での生活に再び順応する必要がある一方で、ガーナで得てきたものを日本でも活かしたい気持ちがあります。ガーナではミサの中で踊ったり手拍子をしたりと大いに体を動かしていたので、日本でじつ

としてミサに与えることにまだ慣れないでいます。日本でも、ミサの中で踊ったり手拍子を取ったりしてもよいのだろうかけれど、一人だけ踊っていても変な人だと思われそうですし、そもそもガーナと日本とはリズムの取り方が異なるように感じています。それでも、少しずつ日本のミサの中でも踊っていいかなどと考えています。

また、ガーナで洗濯物を手で洗うことと、冷たい水でシャワーを浴びることを身につけたので、それを日本でも続けています。でも、これらは季節が冬に向かうにつれ、難しくなりそうです。常夏の国にしばらくいた私にとつて、日本で冬を迎えることがひとつの挑戦となります。そして、ガーナでは道を歩けばあちらこちらから声をかけられていたし、毎日のように近所の人々を訪問して回っていたけれど、日本ではまだそのような体験が出来ないでいます。それゆえに、ガーナの人々とかかわり合いをとっても懐かしく思い出しますし、再びアフリカに行きたい気持ちにさせられます。

日本に帰ってきて、ガーナで言葉での

意思疎通に苦労した分、以前よりも食卓での会話を楽しめるようになった気がします。そして、海外から日本に来て日本語を学び語っている兄弟会員たちを、さなる尊敬の目で見られるようになりましたし、彼らの労苦やストレスを少しは理解できるようになりました。それだけでも、私がガーナで暮らし、喜びや苦しみ味わってきた価値は大いにあるのだと感じます。

神言神学院では、様々な国から集まってきた兄弟会員たちが暮らしています。そして、近くガーナからの神学生二人が日本語と神学を学ぶために来日する予定です。ここにも、神さまからの働きかけを私は感じます。



## 「第十回」 祈りとは？

「だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入つて戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」(マタイ6章6節)。

祈りは神様の臨在の体験です。それは自分の傲慢が放棄され、希望が受け入れられ、嘆願がなされ、すべての人の必要を認め、謙虚さを受け入れ、そして神への依存を主張する場です。さらに祈りは、キリスト教における重要な業であり、信仰と希望の行使であり、神の子である私たちの主イエスを通して、御父の御心に触れる特権的な時でもあります。

聖書では、祈りについて、多くの箇所でも語られています。とはいえ、あまりにも多くの場合に、祈りの必要性を無視し、私たちが望んでいることを実現するためや、起こってほしくない問題を解決する

ために、自分の意志の力だけで行おうとします。しかし、数多くの罪を犯しがちな私たちは、膝をかがめ、罪を告白し、神の赦しを受け、そして主の御心が私達自身の上になされるようにと懇願する必要があります。いつくしみ深い神は主権者であり、すべての人にとって何が最善であるかをご存知だからです。

人間はしばしば、癒し、回心、そして自分の必要性に対する正当な要求を持つて主の所にやつて来ますが、それでも私たちが望んでいる答えが得られません。そのため私たちは混乱し、神が果たして聞いておられるのかと時々疑問に思うこともあります。それでも、私たちは辛抱しながら賛美をささげています。私たちは、神が耳を傾けておられることを認識し、祈りの結果を見たいと願っているからこそ祈るのです。それゆえ、私たちは自分自身のためだけでなく、他の人の

ためにも、いつでも、神に信頼して、信仰に基づいて祈らなければなりません。いつ私たちの祈りが答えられるか分かりませんが、次のことを心に留めなければなりません。「もし私たちに一番良いものを与えたいという主の御心あるいは意志を知っているならば、私たちは心変わりをしてしないで、一途に主に信頼しなければなりません。」

祈りとは、自分が、神の前にすべての罪を告解して、神の臨在の中で自分自身を脱ぎ捨て、神と対話することです。静かな嘆願の中で、私たちは、自分自身の最も深い部分に手を伸ばして、自分たちに必要なことを求めたり、あるいは、自分の失敗を認めたりする時に、神に隠すものは何もありません。もしこのようにするならば、私たちの心は平静になり、傲慢は取り除かれ、神の臨在を味わうことができます。ヤコブの手紙には、「神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます」(4章8節)と書かれています。

祈りから得られるもう一つの利益は、





「平和」です。「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなた方の心と考えとをキリスト・イエスによつて守るでしょう」

(フィリピ4章6―7節)。  
祈りは神の臨在の実践です！

## お知らせ ~ Information ~

### ~聖堂のそうじグループメンバーの募集について~

毎週金曜日 午前10時30分から1時間程度、聖堂そうじグループが聖堂の清掃を行っています。人手不足のため新メンバーを募集いたします。

そうじグループは合計9グループあり、所属するグループを自由に選んで活動する形です。当番制のため、各グループにそうじの当番が回ってくるのは年わずか6回ですので、負担なく活動して頂けます。男女問わず募集していますのでご参加をお待ちしております。

お申込みは事務室受付までご連絡ください。

#### ■事務室受付時間(通常)■

日曜日 9:00~18:00  
火~土曜日 9:30~18:30

※定休日：月曜日・祝日

#### ■売店営業時間(通常)■

火~日曜日 10:00~18:00

※定休日：月曜日・祝日

#### ■ミサ時間案内(通常)■

主日：7時・9時(日曜学校)  
10時30分・12時・18時  
\*第1日曜16時(英語)  
\*第3日曜16時(タガログ語)  
平日：7時/金曜：7時・12時  
土曜：7時・16時(主日のミサ)

(上記受付時間、売店営業時間には変る場合があります)